

第2回記録史料の保存・修復に関する研究集会の開催

94年11月24、25日の2日間にわたり、第2回の記録史料の保存・修復に関する研究集会が開催された。会場の国立史料館には、全国から歴史資料保存利用機関の方々など多数の人が集まった。

会は「記録史料の保存・修復に関する理論と技術の発展をめざして」を総合テーマに、テーマⅠ「災害から記録史料を守る—世界からの報告—」、テーマⅡ「保存の共通基盤を求めて—文書館・図書館・博物館から—」の2部構成になっており、それぞれ一日が当てられた。

初日は森安彦国立史料館長による開会の挨拶の後、廣瀬睦氏（国立史料館）の総合テーマの説明ではじまった。続いてテーマⅠとして、ICA防災委員会の会合で来日した委員の方々をはじめとする報告が行われた。

まず小川雄二郎氏（国連地域開発センター防災計画主幹）よりテーマⅠのあらましが説明された。次いでICA防災委員長のイングマル・フロイド氏（スウェーデン）が「ICAと防災活動」として防災委員会の活動内容、ジョン・マッキンタイア氏（イギリス）の「防災計画の開発と災害リスクの管理」、ブレンダ・バンクス氏（アメリカ）の「災害対策の12のステップ」、J・マッキンタイア氏の「スコットランド国立図書館の事例にみる火災リスクの管理」の報告が行われた。この後昼休みをはさんでI・フロイド氏の「スウェーデンの文書館建造物」、遠藤忠氏（八潮市立資料館）の「災害に学ぶ史料保存施設—低湿地の一事例」、ジャンヌ・マリー・デュロー氏（フランス）の「フランスの保存と防災」、ミリエンコ・パンディチック氏（クロアチア）の「武

力紛争および天災と民族文化遺産の保存—クロアチアの内戦と記録史料の被害状況—」が報告された。各国の実践に基いた防災の技術や理念から参加者が得たものは多く、中でも書庫内のスプリンクラーの実利に触れたJ・マッキンタイア氏の報告や、内戦から文化遺産を守る為に非常な努力を続けているM・パンディチック氏の報告には驚かされるものがあった。また、史料が被災した時、その原因がアーキビストの初歩的ミスであってもきちんと公開し、教訓としていく姿勢を見習うべきだと感じた。

テーマⅡは翌25日に行われた。始めに廣瀬睦氏が文書館・図書館・博物館の社会的役割、機能の違いをふまえた上で、保存のパートナーとして共通基盤をつくりあげるというテーマⅡの概要を説明した。その後実際に文書館・図書館・博物館で記録史料の保存にたずさわっている3名の方が、各館の立場でその活動の報告をされた。

はじめに報告された細井守氏（藤沢市文書館）の「自治体文書館と史料保存」は史料保存と公開の責任を有する組織として、何を保存するか、代替化の問題を含めた保存体制について述べた。庄司明由氏（府中市立中央図書館）は「公共図書館における資料保存とその位置付け」として、利用最優先から利用のための保存へと変化してきたことを報告し、三種の館は機能分化と保存技術及び思想の共有という共通理解を進めるべきと提言された。最後に井上潤氏（渋沢資料館）は「博物館における資料保存の現状と課題」として、保存、公開（展示）、参加・体験への志向変化の中、保存が後手にまわりがちになったことの指摘と、保存管理の専門職の配置、又はネットワークの形成を課題として挙げられた。

このように異種館が共通の問題について情報交換をしていくことは、保存技術の向上や防災の為にネットワークを作る足がかりとして大きな意味がある。今回は文書館側からの呼びかけということもあり、図書館・博物館側の参加者が少ない様であったが、こうした

三者協議の場を続けていくことが重要だろう。

酒井 麻子・藤沢市文書館